

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月1日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520540

研究課題名（和文）国内外の日本語教育環境におけるインプットとタスクが習得に及ぼす影響

研究課題名（英文）The Effects of Input and Tasks on the Acquisition of Japanese in Foreign and Second Language

研究代表者

畑佐 由紀子（HATASA YUKIKO）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40457271

研究成果の概要（和文）：

本研究では、初級・中級・上級の外国語としての日本語の授業を対象として、学習者の発話量と発話の質、教師のインプットと訂正フィードバック、参加者間のインターアクション、そして、インターアクション中に注意を向ける内容について、授業活動のタイプをもとに分析した。そして、これらの結果を、これまで印欧語でしかなくない先行研究の結果と比較をし、日本語の授業の特徴を明らかにするとともに、指導の課題について考察した。

研究成果の概要（英文）：

The present study aims at identifying the characteristic of interactions in Japanese-as-a-foreign-language (JFL) classrooms from multiple perspectives. The recorded classroom data from beginning-, intermediate-, and advanced JFL classrooms as well as pair-work interactions recorded in and outside of classrooms are analyzed in terms of quality and quantities of learner production, teacher input and error corrections, amount of negotiation of meaning and forms, and task types. The results are compared with previous studies in English and other European languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：第二言語習得・日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：インプット、インターアクション、授業観察、タスク、フィードバック

1. 研究開始当初の背景

Krashen (1982) がインプット仮説を提唱して以来、欧米の英語教育 (ESL) や外国語教育 (FL) の分野では、学習者に向けられた言語 (インプット) の特徴と習得の関係、学習者と教師、学習者同士のインターアクションの習得への効果、明示的文法説明の効果、コミュニケーション・タスクと学習者の産出 (アウトプット) の関係など、教室活動や指導法に関わる様々な研究が行われている。先行研究から、言語運用能力に役立つのは、言語に関する明示的知識ではなく、暗示的な知識であることがわかっている。また、明示的知識は文法説明などで得られるが、暗示的知識の構築には不十分であることや、暗示的知識の構築にはインターアクションが重要な役割を果たすことが分かっている。特に会話中に発話の問題が生じた時、お互いの意味や言語形式について確認、訂正を促すといった行動 (意味交渉・形式の交渉) が言語知識の内在化に貢献することが分かっている。そして、意味交渉や形式の交渉の頻度や内容は、教師の主導権をとる授業活動かそうでないものによることや、ペアやグループで行うタスクの特徴によって異なることが報告されている。例えば、ペアワークではペア同士が不完全な情報を有し、話し合いによって共有していく双方向性タスクは、ペアの一人がすべての情報を有し、相手に伝達する一方向性タスクより効果的であるとされてきたが、近年、タスクの難易度によっては、一方向性タスクの方がより多くの意味交渉を生み出すという研究結果も報告されている。これらの研究の殆どは ESL やスペイン語、フランス語のイマージョンプログラムなどで行われており、研究

手法としては、実験、授業観察記録を用いた授業活動分析、会話・談話分析など多岐にわたる。日本語でも、リキャストと呼ばれる訂正フィードバックの認知的実験などのフィードバックに関する研究が行われているが、教室活動全体を通して総合的に意味交渉やフィードバックについて分析した研究は、国内外を問わず、まだ十分行われていない。また、日本語は、中級レベルに達するのにスペイン語の約 2 倍から 3 倍の授業時間を必要とするほど、欧米の学習者にとって難しい言語の一つとされ (FSI, 1999)、米国での印欧語と日本語では授業活動は著しく異なる。従って、印欧語での研究成果を日本語の教育現場にそのまま当てはめることには問題がある。このような現状から、日本語教育現場での指導と習得の関係を体系的に比較研究することは重要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究での目的は以下の 3 点である

- ① 日本語の教室活動の特徴を量的に明らかにし、印欧語の先行研究と比較する
- ② 日本語教育機関で、授業観察と授業活動、教室内インプット・訂正フィードバック及びペアワークの分析を通して、学習者の発話や発話問題の解決ストラテジーや意味交渉が発話修正や言語習得に及ぼす影響を分析する。
- ③ ペアワークにおける、タスクタイプとタスクの難易度がタスク遂行中のインターアクションや意味交渉に与える影響を分析する。

3. 研究の方法

本研究では米国の 2 つの大学で日本語の初級から上級までの授業、計 45 時間分を

ビデオに収録した。また、これらの授業に参加している学習者の内、15名にICレコーダーを渡し、授業中の発話を録音してもらった。さらに、授業外でペアワークタスクを行ってもらい、発話を収録した。これらの収集したデータは、書き起こした後、授業観察記録システムCOLTを用いて授業活動の形式、授業活動の目的、話し手と聞き手の関係、発話の目的、インタラクションタイプ、発話の長さ、形式、正確さ、聞き手の反応形態などについてコード化し、教室活動の特徴を探った。また、COLTおよび先行研究をもとに、意味交渉の種類、意味交渉の頻度、訂正フィードバックの種類、訂正フィードバックの頻度、発話修正の頻度と正確さなどについて分析した。

4. 研究成果

本研究の成果は7つの学会発表、5本の論文、および報告書に的まとめた。本研究では、まず初級の日本語の授業の特徴をCOLTをもとに分析し、印欧語の授業と比較した。その結果、日本語の授業は印欧語と違って文法重視である反面、教師が学習者に積極的に発話を促している点で異なることが分かった。

次に、初級・中級・上級の授業で行われたペアワークの特徴を発話の長さ、正確さ、流暢さをもとに分析し、言語能力やタスクによる違いがあるかどうかを調査した。その結果、初級の授業では学習者の自発的な発話を促す活動は少なく、学習者の注意が正確さに向けられていることが分かった。一方、中級と上級の授業では、学習者に自由な発話を促す活動や、特定の文法項目に注意させる活動が見られたが、学習者の注意はあまり言語項目に向けられていないことが分かった。

第三に、初級の授業の教師の訂正フィードバックの使用傾向と成功率について調査をした。その結果、教師は教師主導の授業活動では、学習者の間違いの殆どに訂正フィードバックをしており、修正率もフランス語のイメージや英語のイメージのクラスより高いことが分かった。

更に、イメージのクラスで日本語のみが使われる授業であったため、母語使用が禁止されていない外国語教育の授業を対象としてフィードバックの分析を行った。しかしながら、両者において、学習者の母語の使はほとんど見られなかった。この場合、データサイズを30時間に増やして、教師の訂正フィードバックの特徴と効果を測定し、以下の結果を得た。訂正フィードバックの使用傾向と効果においては、引き出しやリキャスト、メタ言語フィードバックが使われる傾向が高かった。また、引き出しの効果は教師に関わらず比較的高かったが、リキャストの効果は教師によって差があることが分かった。更に、リキャストは意味に焦点が当たった活動で、メタ言語フィードバックは文法に焦点が当たった活動で使用されやすいことが分かった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- (1) Hatasa, Yukiko. Assessing pedagogical implications from JFL research. The Journal of Japanese Language and Literature, 46, pp. 125-142. 2012年3月 査読有
- (2) 畑佐由紀子・藤原ゆかり「授業中のペア・グループワークのタイプと学習者の発話一意味と形式の交渉と発話量と質の分析

一」『第10回日本語教育国際研究大会（世界日語教育研究大会）論文集』pp.

409-410, 2011年8月 査読有

- (3) 畑佐由紀子・藤原ゆかり 「外国語としての日本語の授業におけるタスクタイプと学習者の発話と焦点化の分析」『広島大教育学研究科紀要』第二部 pp. 163-172, 平成2010年12月 査読無
- (4) 石澤徹・須摩亜由子・鄭立民・畑佐由紀子「COLT 分析から見えるコミュニケーション型な授業の特徴—練習活動に着目して—」『2010 世界日本語教育大会論文集 (DVD 版)』論文番号 336. 2010 年 7 月 査読有
- (5) 畑佐由紀子・木村典子・高田悠紀子・石澤徹 「初級日本語授業における訂正フィードバックの特徴—学習者のアップテイクと修正の観点から—」2010 世界日本語教育大会論文集 (DVD 版)』論文番号 358 2010 年 7 月 査読有

〔学会発表〕（計 8 件）

- (1) 畑佐由紀子・藤原ゆかり「教師主導型活動とペアワークにおける教師の訂正フィードバックの効果」, 2012 年日本語教育国際研究大会, 名古屋大学, 2012 年 8 月 18 日採択済
- (2) 畑佐由紀子 「文法重視・コミュニケーション重視の教育と日本語らしさの育成」, 真理大学 2012 年第六回外国語文教学與跨文化研究學術シンポジウム, 台湾真理大学, 2012 年 4 月 28 日
- (3) 伊藤亜希・畑佐由紀子 「日本語学習者の話し合いタスクにおける談話の特徴」, 2012 AATJ Annual Conference, Toronto, Canada, 2012年3月15日
- (4) 畑佐由紀子・藤原ゆかり 「初級・中級・中上級の授業における教師主導型活動とペア・グループ活動における学習者の意

味と形式への焦点化と発話の特徴」,

2011 年度日本語教育学会秋季大会, 米子コンベンションセンター, 2011年10月9日

- (5) 畑佐由紀子・藤原ゆかり 「授業中のペア・グループワークのタイプと学習者の発話—意味と形式の交渉と発話量と質の分析—」, 第10回日本語教育国際研究大会（世界日語教育研究大会）, 中華人民共和国天津外国語大学, 2011年8月21日
- (6) Hatasa, Yukiko and Yukari Fujiwara. (2011). “The relationship between types of pair work and learner production.” Association for Teachers of Japanese 2011 Annual Conference, University of Hawai’ i at Manoa, 2011年4月2日
- (7) 石澤徹・須摩亜由子・鄭立民・畑佐由紀子 「COLT 分析から見えるコミュニケーション型な授業の特徴—練習活動に着目して—」, 2010 世界日本語教育大会 台湾国立政治大学, 2010 年 7 月 31 日
- (8) 畑佐由紀子・木村典子・高田悠紀子・石澤徹 「初級日本語授業における訂正フィードバックの特徴—学習者のアップテイクと修正の観点から—」, 2010 世界日本語教育大会 台湾国立政治大学, 2010 年 7 月 31 日

〔図書〕（計 1 件）

畑佐由紀子『平成 21 年度～平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 一般 研究成果報告書 国内外の日本語教育環境におけるインプットとタスクが習得に及ぼす影響』pp. 1-101, 2012 年 3 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畑佐 由紀子 (HATASA YUKIKO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：4 0 4 5 7 2 7 1

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：